

# だれ 「誰もが楽しめるテレビ放送を」 みんな 民間テレビ放送の創始者 そうししや

しょうりき まつ た ろ う  
正力 松太郎



## テレビ会社設立

「日本でテレビ放送？ 今、そんな事業をやるという人なんて、いるわけがない」

1948(昭和23)年、アメリカでテレビ事業が始まって間もなく、日本でもテレビ放送を行ったらどうかという話が出たときのことです。

話を聞いたほとんどの人が、それは無理だと思いました。

戦争が終わって3年、まだまだ日本の社会は大きく混乱していた時代です。人々は、毎日の生活で頭がいっぱいで、心に余裕などないころでした。

ところが一人、「ぜひ自分がやる」と意気込んだ人物がいました。この人こそ、正力松太郎さんです。松太郎さんは、それまで、警察の仕事や読売新聞の社主などさまざまな分野の仕事をしていました。すでに60歳を超えていましたが、テレビ放送という



アメリカで、テレビ放送が始まったそうだが、日本も、いずれテレビの時代がきてみんな、夢中になるだろう。よし、誰もやらないのなら自分がテレビ放送を実現しよう。

その日本テレビという会社をおこしたのは、正力松太郎さんだね。



日本ではじめて、民間のテレビ放送が始まったのは、1953年8月28日午前11時20分だよ。



テレビ放送は、どのようにして始まったのかしら？

### 3 仕事を起こそう

西暦	年齢	
1885年		枇杷首村（現在の大門町）に生まれる
1907年	22歳	東京帝国大学独逸法科大学（現在の東京大学法学部）に入学する
1924年	39歳	読売新聞社7代目社長に就任する
1931年	46歳	第1回日米野球戦を開催する
1934年	49歳	日本初のプロ球団である大日本東京野球倶楽部（現在の読売巨人軍）をつくる
1952年	67歳	日本テレビ放送網株式会社の社長に就任する
1953年	68歳	テレビ放送をはじめ
1955年	70歳	衆議院議員になる
1969年	84歳	亡くなる

正力松太郎さんの三十二年表



大門町立大門小学校6年生のお友達が、正力・小林記念館で、松太郎さんについて調べました。

新しい分野に挑戦したくなったのです。

テレビ放送が実現すれば、多くの人々が喜んでいない。日本の文化を向上させ、国民の生活を豊かにすることに努めるはずだ。

松太郎さんは、新しい目標に胸が高鳴りました。

「なんとしても、テレビ放送を実現させよう」

松太郎さんは、さっそく、政府に放送免許の許可を願いました。そして、会社設立のために、資金集めを始めたのです。

松太郎さんは、大きな会社を経営する人々に自分の信念を語り、資金を出してほしいと協力を頼みました。

「テレビ放送は、国家的な事業です。すぐに、テレビの時代がやってくるでしょう」

松太郎さんの熱心な説明に、読売、毎日、朝日の各新聞社から1000万円ずつ、さらに鉄鋼・製紙会社などから、合計8億円もの資金が集まったのです。

松太郎さんは、残りのお金2億円は公募することにして、会社を設立しました。準備期間は、わずか4年間という短さでした。

### わき出てくるアイデア

会社をおこすための資金は用意できたものの、次の問題が、松太郎さんを待ち構えていました。

会社が黒字になるやりかたを、考えなければならなかったのです。実は、アメリカでもテレビで黒字の経営を行うには、4年以上かかっていた。正力さんは、どんなことをするつもりだろう。

多くの人々が松太郎さんのやりかたに注目しました。松太郎さんは、考え込みました。

テレビ事業の成功のためには、テレビの広告料をいかに集めるかが問題だ。そのためには、多くの人にテレビを見てもらわなければ。

当時のテレビは、15万円以上もする高価なものでした。サラリーマンの約1年分の給料に相当するお金です。

そのため、最初、契約台数はわずか数千台でした。これでは、テレビで広告を流しても効果が期待できないため、スポンサーがつかえません。

「そうだ、街頭テレビを設置すればいい。1台のテレビを、大勢の人々に見てもらえばいいんだ！」

松太郎さんは、関東地方の多くの人が集まる、公園、広場、駅といった公共施設にテレビを置きました。

そうして、テレビ放送というものをじかに見てもらおうと思ったのです。



街頭テレビが設置されると、大勢の人が集まり、身動きもできないほどでした。



## プロ野球の父

松太郎さんは、読売新聞社を<sup>けいせい</sup>経営していたころ、アメリカの大リーグの一流選手を2度日本に招きました。国内各地で、学生チームと交流試合を<sup>かいさい</sup>開催したのです。人々は、本場大リーグの選手のプレーに夢中になりました。

1934(昭和9)年、高まる野球の人気に、松太郎さんは日本初のプロ野球球団である「大日本東京野球倶楽部(現在の読売巨人軍)」を創設しました。

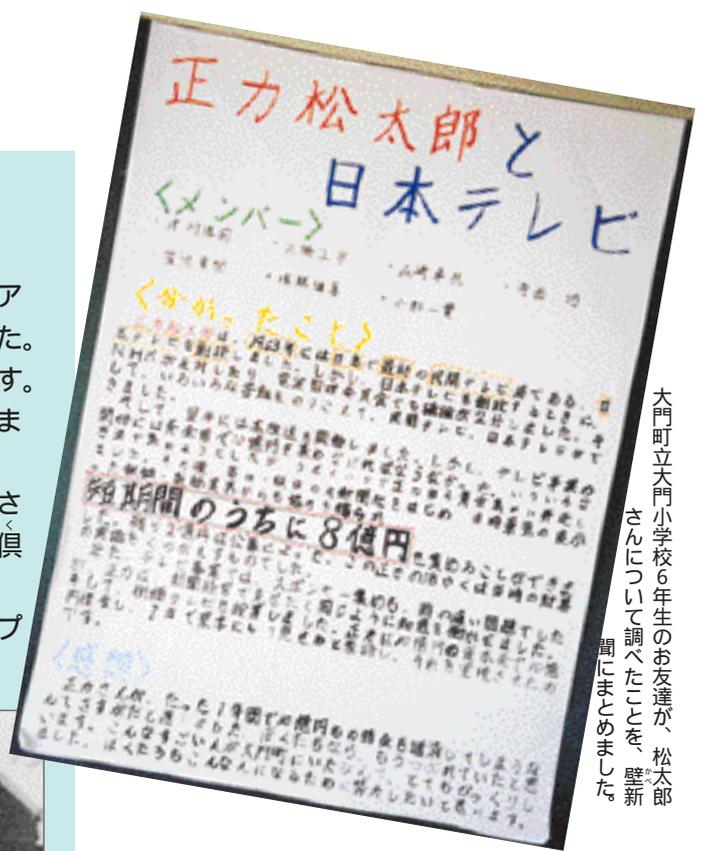
その後、プロ野球初代コミッショナーとしても、プロ野球の発展に尽くしました。



大リーグの選手と握手をする松太郎さん。



セントラル・リーグ開幕の始球式。(1967年)



大門町立大門小学校6年生のお友達が、松太郎さんについて調べたことを、壁新聞にまとめました。

## みんなが楽しめる番組を

松太郎さんは、放送番組にも工夫をこらしました。当時、人気のあつたプロレス中継に注目したので、さらに、読売巨人軍の試合を中心としたプロ野球や、大相撲、プロボクシングの中継など、人々が喜ぶ番組を放送したので。

動きがあるスポーツは、テレビで放送するのにふさわしい。それに、すばらしいスポーツの試合は、人々をきつと感動させるはずだ。学生時代、柔道に夢中だった松太郎さんは、スポーツには多くの人々を引きつける魅力があることを知っていたのでした。

松太郎さんのやりかたは、大成功でした。人気の番組を無料で自由に見られるとあつて、人々は街頭テレビに熱狂し、テレビのあるところには、必ず黒山の人だかりができたのでした。

街頭テレビの影響で、テレビは爆発的な勢いで売れ始めました。喫茶店や飲食店だけでなく、やがて一般の家庭でも、テレビを買うようになった。

## 子どもたちの感想

大門町立大門小学校6年生のお友達の感想です。

正力さんはいろいろな工夫をした人でしたが、ぼくが一番注目したのは、街頭テレビでした。街頭テレビの案は、すごい印象に残りました。こんな方法で「テレビを買いたい」という気持ちを強くするなんて、びっくりしました。頭を働かせて工夫をして、たった1年間で10億円もの借金をあつさり返してしまつたんです。正力さんは大門町のほりどと思えます。

(才川惇司さん)

読売新聞を大きくして、さらにテレビ事業もして、10億円の借金を1年で返したなんて、正力さんは何でもできるので。私も、正力さんのように前向きで、もし反対されても自分の信じたことをやりとげられる人になりたいと思います。

(窪池貴子さん)

今の時代、テレビがないなんて、考えられません。今テレビがあるのは、正力さんのおかげだと改めて思いました。

(山崎卓也さん)

正力さんは、「まず考える人」ではなく、「まずやってみる人」でした。いろいろなことに前向きに進んでいった正力さんを見習いたいと思います。ぼくも、正力さんのような前向きで強い心を持ちたいと思います。

(中出大地さん)



**松太郎さんのエピソード** : 松太郎さんは、読売新聞の社主としても腕をふるいました。新聞にラジオ欄を載せたり、納涼博覧会を開催して読者を招待したりするなど、さまざまな工夫で、読売新聞の部数を増やしました。

その結果、松太郎さんは、わずか7か月で黒字を達成しました。これには、世間の人々はびっくりしました。

その後も、松太郎さんは、子どもから大人まで一般の人々が喜ぶような番組を放送することが一番大切だと考え、みんなが楽しみにするような番組を送っていました。

## 日本全国をつなぐ放送網

松太郎さんは、テレビ会社をおこしたとき、東京と全国の地方の放送局をつないでいて、互いに情

報や映像を伝え合うネットワークをつくらうと考えていました。

当時、これは、時代の先を見越した考え方でした。その考え方は、松太郎さんがつけた「日本テレビ放送網株式会社」という名前によく現れています。

松太郎さんは、東京と地方を結ぶネットワークを広げていきました。また、より鮮明な映像を伝えようと、後にカラーテレビ放送などを推し進めていきました。

このように、松太郎さんは、さまざまなアイデアと行動力で、民間初のテレビ放送を成功させ、発展させていったのでした。

2003年から、地上波デジタル放送が始まり、現在、テレビは松太郎さんの活躍していた時代から、飛躍的に進化しています。

新聞社の社主や政治家など、さまざまな分野で活躍した人でした。



鉄鋼やホテルなど、さまざまな事業に取り組んだ実業家

### 大谷 米太郎



いくつもの仕事を経験した正力松太郎さんのように、大谷米太郎さんも、さまざまな分野の仕事に取り組んだ人でした。西砺波郡正得村（現在の小矢部市水落）に生まれ、30歳で上京した米太郎さんは、荷揚げ人足や相撲取りを経験したあと、鉄鋼業の下請工場を設立して、実業界に入ったのです。

米太郎さんは「粘り強く、しつかり足を踏みしめていけば、何事もきつと成功する」と固く信じ、つぎつぎと会社を設立していきました。東京オリンピックのときには、外国人観光客の宿泊のために「ホテル・ニューオータニ」を建設したり、流通経済の発展を願って、「東京卸売りセンター」を創設したりしました。また、大谷技術短期大学（現在の富山県立大学）や国技館のために多額の寄付をしました。

正力松太郎さんの同級生の実業家

### 河合 良成



河合良成さんは、高岡中学（現在の高岡高校）で正力松太郎さんに出会いました。明るくて親分肌の松太郎さんは、良成さんの大切な友達でした。松太郎さんにとっても、豊かな知識と創造力をもつ良成さんは、魅力的でした。二人は、「それぞれ歩んでいく道は違っても、ずっと友達でいよう」と約束し、実際、60年以上も友情を大切にしました。

良成さんは、政府の役人として、株を扱う財界人として、生命保険会社の社長として、さまざまな分野で活躍しました。また、アメリカの大企業ブルドーザーよりも、もっと精度の高いブルドーザーを開発して、小松製作所を救いました。

正力松太郎さんは、民間初のテレビ放送という分野を切り開いた人でした。次のページで紹介する瀬木博尚さんは、日本で初めて「広告」の仕事を切り開きました。